

余暇のひととき

文化協会より

短歌

△水沼短歌会▽

城郭の伴侶のごとき松消えて仰ぐ白亜の何ぞ悲しき

谷 静雄

寒の風と日ざしをうけて軒下の切り干し大根乾ききりたり

竹城 美智代

わがひと世になし得るはなべて終へにしひとり生家の櫻を仰ぐ

山田 田鶴

念願のスカイツリーの展望台眼下生き生き東京動く

毛利 ユリ子

初暦まだ見ぬ月日に思いよせ平穏なれと祈る元旦

土居 シゲ子

雪景色遠き山脈求めつつ友らとともに県境を越ゆ

芝 征子

宮島の鳥居をめぐる遊覧船たえまなく来る街灯り背に

黒田 登代子

石船の先に止まりし百舌一羽張りし氷りをみつめ動かず

井関 恭子

足引きの鬼ヶ城風に吹かれおり立春を明日にひかえし朝

生田 八壽子

俳句

△吉田町俳句協会A▽

正論を吐いて疎まる葱坊主

稲瀬 奈加枝

ふるさとは近くて遠し花菜風

清水 十藻子

春宵の衣桁にかかる江戸小紋

長谷 みつる

蕨干す日向寂しき隠れ村

福永 立青

共過ぎに馳せる八十路や朧月

岡田 幸子

川柳

△川柳鹿の子吟社▽

父征きし線路たどれば桜散る

水谷 ハルミ

眠りより覚めたる山の勢かな

薬師寺 清子

燕来る空にシグナルある如く

加賀山 八代

春の闇へッドライブで探りをり

山下 朝海

さくらさくら風に休んでいけと言ふ

さくら 陽子

うららかや耳を搔くとき眼を閉ぢて

中岡 きぬ

黄水仙活けて安らぎ取り戻す

平山 千代

菜の花や肌にあざしきネックレス

土居 未紗

真珠育つ海へ春光かぎりなく

茅田 春恵

春宵の常に微笑む遺影かな

村上 志都

加齢とは哀しき言葉ふらここに

井上 志津

菜の花やうねりの沖を往く小舟

辻 志津

春落葉かさなりあひて吹かれるる

今城 夏枝

初節句産着に家紋入れにけり

宮川 千穂

百姓に百の夢あり種を蒔く

児玉 隆子

汗かいて酒が辛い癒される

宇都宮 忍

予定表病院予約日を埋める

大西 直子

雑談にピカリ光った知恵もらう

男武 志津江

やり遂げた背なへ夕陽が暖かい

片山 辰巳

お先にどうぞ合わぬ歩幅が申し上げ

古本 鈴代

新聞とテレビ相手の車椅子

中村 地青

くり返す朝日夕日へありがとう

日高 伸子

千支に凝り一事が万事直ぐ暦

程内 玄雄

怒つても孫には見せる別の顔

松本 圭市

思い出もメタボになった同期会

松本 志津子

休みではないシャッターに寒い街

森 ひさし